

## 主イエスはできる

2007. 7. 17 (火)

ベック兄メッセージ (メモ)

引用聖句

ヘブル人への手紙 7章25節

したがって、ご自分によって神に近づく人々を、完全に救うことがおできになります。キリストはいつも生きていて、彼らのために、とりなしをしておられるからです。

これこそ「良いニュース」ではないでしょうか。主はできる。主にとって不可能なことはない。結局、初代教会の兄弟姉妹の喜びにあふれた証しとは、そのことでした。私たちの主は生きておられます。この主は何でもできるお方です。

二、三日前、可愛い手紙をもらったのです。本人の許可なしにちょっと紹介致します。(笑)『こんにちは。Aです。ドイツキャンプでは大変お世話になりました。どうもありがとうございました。今回ドイツキャンプ参加は、私にとってとても特別なものとなったと思っています。スペシャルでした。』

参加する前はまったく行きたくなくて、イエス様に散々文句を言っていました。今思えば本当に私は馬鹿者です。行く前は不安だったので、お友だちがほしいとか、行ったら祝福がほしい、嫌な思いは一秒たりともしたくない。こんなに頑張って仕事をしたのだから、ご褒美がほしいとか、とにかくいろいろなことをイエス様にお願いしていました。

イエス様は本当にすごいです。すべて私の祈りを聞いていてくれて、私の想像以上の祝福と喜びを用意してくれました。私は毎日、毎日、嬉しくて、嬉しくて心から感謝していました。こんなに喜んでいたことがないと思うくらい、毎日イエス様からの恵みを喜んでいました。特にドイツ人の兄弟姉妹が優しくしてくださったことや、シュベスターたち、若い女の子たちと仲良くなれたことは本当に嬉しかったからです。私は英語もできないし、ドイツ語もまったく分からない。だけど仲良くなりたくて、イエス様にお祈りしたのです。「イエス様。私は英語を話せないし、ドイツ語も分からないのです。でも彼女たちと話したいし、仲良くなりたいから、どうかイエス様が私の中に入って導いてください」と祈りました。そうしたら本当にその願い、祈りを叶えてくださったのです。本当にイエス様だって確信しました。イエス様がいつも、いつも私の心の祈りや思いを見ていてくれるのだと体験することができました。そして私が祈ったことよりも、もっと、もっと素晴らしいものを用意してくれているのだと思いました。心から感謝しました。

私を選んで造ってくれたことは、すごいことですね。イエス様、ありがとうございます。ここまで祈り続けてくれた両親、家族にも心から感謝しました。私は恵まれている、幸せ者だなあとしみじみ思うことができました。天国ってこんな感じなのかなあとと思いました。

前は稲毛の家庭集会、我が家でやっているのも、ものすごく嫌で嫌で、集会も嫌いだったけれど、今は我が家でやらせてもらえていることが感謝です。A家は全然綺麗ではないし、狭いし…。だけど兄弟姉妹が来てくれてとても嬉しいです。

私はドイツであんなに喜んでいたので、日本に帰って来て、仕事して、生活していると、喜びがなくなってくるのです。私は自分が嫌になります。悲しいです。あの喜びは本物で体験させてもらったはずなのに、今の私はまったくイエス様の喜び、祝福、恵みを感じないのです。祈っても…。何なのでしょう。イエス様のほうを見ていれば、平安と喜びがあるはずだと知ってはいるけれど、そうならない私がいるのです。私はいったい何なのでしょう。何のために生きているのだらう。イエス様を喜ぶために生きているのではないのか、と思います。まったく駄目な者ですね。情けないというよりも、あんなに大きな祝福をいただいたのに、どうして私は喜び続けられないのか。本当に自分が嫌になります。

最近イエス様に、「私の人生すべてをお任せしたいです」とお祈りしています。人生を導いてほしい。私が考えるよりもっと素晴らしいことをドイツで用意してくれていたから、これからも喜びの人生の計画を立ててほしいのです。今までは夢とか、やりたいこととかあったけれど、それもすべてイエス様のみこころのみが成し遂げられると知ったのです。だからお願いしてお祈りしています。そして、どんなときでもイエス様を見て、イエス様を感じて感謝する強い、根強い信仰がほしいです。

イエス様。どうかこんなに腐っている私を、どうか、どうか、あなたを喜ぶ者と変えてください。

たくさん書いてしまってますみません。お忙しいのに申し訳ないです。でも、ベック兄弟、ミンヘン姉妹にお礼がしたかったのです。イエス様のことを伝えてくださったこと、福音を宣べ伝えてくださっていること、ありがとうございます。そのおかげで私はイエス様と出会うことができました。私が生まれる前から日本で大変苦勞して、ここまで広めてくださり、本当に、本当にありがとうございます。私も、もっと信じる、信じきる信仰がほしいので、お祈りしています。イエス様はかならず聞いてくださいますよね。イエス様。どうかよろしくお祈りします。

それから、第一歴代誌 22 章 19 節を書いているのですけれど、  
歴代誌・第一 22 章 19 節

**「そこで今、あなたがたは心を尽くし、精神を尽くして、あなたがたの神、主に求めなさい。立ち上がって、神である主の聖所を建て上げ、主の御名のために建てられた宮に、主の契約の箱と神の聖なる器具を運び入れなさい。」**

こんな私ですが、喜ぶ者と変えられたいので祈っていただけたら嬉しいです。暇なときに…ですよ。またお会いできるのを楽しみにしています』

A 」

その後、彼女は倉敷の喜びの集いに参加したのです。二人のお兄さんたちと一緒に。結局、人間は誰であっても、(彼女もちろん若いけれど) 悩む者です。今の世界は一つの大きな病院のようなものです。

けれども、今の箇所へブル書7章25節を読むと、はっきり書き記されています。「イエス様はできる」。何とかできる、というよりも、「完全に救うことができになる方」です。

そして、この箇所を読んではっきり言えることは、近づくことが許されている、祈ることが許されているだけではなく、「主ご自身が待っておいでになる」ということです。

人間は時々挨拶として、「よく来たね」と言います。けれど、私たちが祈ると、イエス様は必ずそうおっしゃいます。「よく来たね。待っていたよ。あなたの祈りを聞きたくて、聞きたくてしかたがなかった」と。主ご自身が近づいてくださるお方なのです。

次のように書かれています。

詩篇 59篇10節前半

**私の恵みの神は、私を迎えに来てくださる。**

放蕩息子の父親のように、主は迎えてくださるお方です。将来何を経験するようになるのか、私たちは今もちろん分かりません。喜びを与える者になるのか、悲しむ者になるのか、まったく分かりません。けれど一つのことだけ確信できます。即ち、「主ご自身がまず、私たちを迎えに来てくださる」ということです。忘れられないようにしましょう。主は、今日、または明日、もしかすると明後日、私たちを迎えにきてくださるかも知れません。

急な山道を登るとき、主は力をもって迎えに来てくださいます。

暗やみの道に行くとき、主は光をもって迎えに来てくださいます。

つらい道を歩むとき、主はなぐさめをもって迎えに来てくださいます。

寂しい道を歩くとき、主は愛をもって迎えに来てくださいます。

危険な道を歩むとき、主は勝利をもって迎えに来てくださるのです。

イエス様は、完全に救うことができになるお方です。イエス様を生んだマリヤという女性は、この救いにあずかるようになったのです。聖書には次のように書かれています。みなさん暗記しているみことばでしょう。確信を持った信仰の表われです。

ルカの福音書 1章46節から48節

**マリヤは言った。「わがたましいは主をあがめ、わが霊は、わが救い主なる神を喜びたたえます。主はこの卑しいはしために目を留めてくださったからです。」**

マリヤは、(ほかの言葉で言いますと、)「私は幸せです。主は私の救い主です」と。このことをマリヤは身をもって体験しました。即ち、主なる神は遠く離れているところにおられるお方ではありません。怒りに満ちたお方でもありません。父なる神様は御子イエス様を私たちの救いのためにこの世にお遣わしになりましたので、私たちは大いに喜ぶことができるのです。

マリヤのように、「主なる神はわが救い主」と言うことができる人は本当に幸せです。

イエス様は、私たちに完全な救いをもたらすためにこの世に来られました。「救い」とはいったい何なのでしょう。言うまでもなく、「まことの救い」とは、いわゆる人間の求めている幸せではありません。救いとは本当の「愛」であり、絶えざる「平安」であり、主の前に立つことができるための「義」です。従って、救いとは過去の克服です。

主なる神は人間のわがままを赦すお方です。イエス様は債務と罪の支払いと赦しを提供しておられます。虚しさからの解放を提供しておられます。イエス様は、人間一人一人の救い主となるために、約束された救い主としてこの世に来られたのです。

聖書は次のように言っています。み使いのことばです。

ルカの福音書 2章11節

「きょうダビデの町で、あなたがたのために、救い主がお生まれになりました。」

複数形ではなくて単数形で読んでもいいでしょう。「あなたのために、救い主がお生まれになった」。

イエス様は、「わたしは、失われた人を捜して救うために来たのです」と言われました。つまり、イエス様にとって大切であったのは失われた人々でした。「自分はOK」、そういう人々のためにイエス様は来られなかったのです。

ヨハネの福音書 3章17節

神が御子を世に遣わされたのは、世をさばくためではなく、御子によって世が救われるためである。

とあります。

ペテロは、次のように宣べ伝えたのです。

使徒の働き 5章31節

「神は、イスラエルに悔い改めと罪の赦しを与えるために、このイエスを君とし、救い主として、ご自分の右に上げられました。」

長い間イエス様のことを分かろうとしなかったパウロが、回心の奇蹟を経験するようになり、その後殉教の死を遂げる前に書いたのです。

テモテへの手紙・第一 1章15節

「キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世に来られた。」ということばは、まことであり、そのまま受け入れるに値するものです。…」

イエス様は、ただひとりの救い主です。イエス様が罪の問題を全部解決してくださったゆえに、イエス様こそただひとりの救い主であられるのです。けれど、このイエス様は、いかにして私たちの救い主となることができになるのでしょうか。

当時の羊飼いたちは、この世に現われた救い主を拝みました。礼拝したのです。当時の博士たちはイエス様を礼拝しただけでなく、それだけではなく、すべての支配権をイエス様に明け渡したのです。

私たちはまずイエス様のみもとに行き、すべてを幼子のように告白し、自分のわがままを悔い改めなければなりません。そして、次のように祈ることが大切です。

「私が心から罪を悔い改めて、まったく新しい人間になることが赦されますように」と。それと同時に、さらに私たちは心からなる感謝をささげることです。「私はあなたに心から

感謝致します。あなたが私の身代わりとなって、尊い代価を支払ってくださり、私の罪を赦し贖うために死んでくださったことを、心から感謝申し上げます。私の罪と債務は赦され、支払われています。今や良心の呵責に責められることもなくなりました」と。

この確信が私たちの生活の土台となっていない場合には、私たちにとってすべてはむなしくなります。それは一番大切なものが欠けているからではないでしょうか。

イエス様を本当に体験した人はもはや孤独な人ではありません。「イエス様が私のために生きておられ、いつもともにおられ、私のために全力をもってすべてをなして下さる」というこの確信を持つことができるからです。そして、イエス様の力は無制限なものです。

イエス様はこの地上における生涯においても、この力を明らかにしてくださった証拠があります。自然界などに対して、ご自身の絶対的な力をお示しになりました。福音書の中にあります。

ルカの福音書 8章25節

イエスは彼らに、「あなたがたの信仰はどこにあるのです。」と言われた。弟子たちは驚き恐れて互いに言った。「風も水も、お命じになれば従うとは、いったいこの方はどういう方なのだろう。」

もちろん、イエス様は、自然を従わせる力のみを明らかにして下さっただけでなく、もっと大なる力を明らかにして下さったのです。即ち、「罪を赦す力」です。

マタイの福音書 9章2節後半

イエスは彼らの信仰を見て、中風の人に、「子よ。しっかりしなさい。あなたの罪は赦された。」と言われた。

6節前半

「人の子が地上で罪を赦す権威を持っていることを、あなたがたに知らせるために。」

このようなことばをイエス様の口から聞いた人々は、即座に変えられたに違いありません。「子よ。あなたの罪は赦されている。もう安心しなさい」。

使徒行伝の中で、

使徒の働き 10章38節

「神はこの方に聖霊と力を注がれました。このイエスは、神がともにおられたので、巡り歩いて良いわざをなし、また悪魔に制せられているすべての者をいやされました。」

とあります。「この方」とは、「ナザレのイエス」です。

この地上において、イエス様は、無制限の力について語られたことがあります。最後のことばだったでしょう。

マタイの福音書 28章18節

「わたしには天においても、地においても、いっさいの権威が与えられています。」

イエス様は、永遠のいのちを与える権利も持っておいでになります。

ヨハネの福音書 17章2節

「それは子が、あなたからいただいたすべての者に、永遠のいのちを与えるため、あなたは、すべての人を支配する権威を子にお与えになったからです。」

そしてまたさらに、イエス様はご自分のいのちに対する権威をも持っておられました。よく知られている箇所です。

ヨハネの福音書 10章18節

「だれも、わたしからいのちを取った者はいません。わたしが自分からいのちを捨てるのです。わたしには、それを捨てる権威があり、それをもう一度得る権威があります。」

イエス様は確かによみがえらされたのです。それだけではなく、ご自分でよみがえる力を持っておられたのです。

私たちとイエス様との違いは、言葉に言い表わすことができないほど大きなものです。

イエス様の権威は無限であり、それに対して私たち人間の権威などとはまったく無力なものです。私たちは来る日も来る日も自分の力をはるかに超えたものを要求され、それが続くとまったく逃れ道のない状態に陥ってしまうのです。

その時に、私たちは私たちの救い主なるイエス様に次のように祈り、願い求めることができるのです。「主イエス様。あなたの恵みと権威をどうか豊かに示し、現わしてください。あなたなしには、もう私は一歩も先へ進むことができないからです」。

このへりくだった態度をとると、主は働いてくださるのです。イエス様は私たちの祈りに応えて、ご自分の大いなる権威を現わしてくださるのです。このように、すべてを主にゆだねた者には、必ず主が大いなる御力と権威を現わしてくださいます。

またイエス様は、私たちが日々、新たにイエス様を救い主として体験し、イエス様こそ完全に救うことができるお方であることを体験的に知ることを望んでおいでになります。イエス様が私たちに大いなる力を現わすことができるために、日々、主との交わりを持つことがどうしても必要です。

けれど残念なことに、多くの信者は自分のことだけを考え、いつも自分のことでいっぱいになってしまい、自己中心的な生活をすることによって、主が現わしてくださる権威のことを忘れてしまいます。この事実を多くの信者は認めたがらないのですが、その実際生活を見るとよく分かります。イスラエルの経験について書かれているみことばです。

詩篇 106篇21節

**彼らは自分たちの救い主である神を忘れた。**

彼らは、すでに救われた者であったにも関わらず、いつの間にか自己決定と自己支配の生活に戻ってしまったのです。私たちが自分の力で主に仕えようとしたり、主に完全により頼むことをしないなら、そのことが、言うまでもなく自分の救い主を忘れていることを意味しているのです。

私たちが、救い主を忘れ、おのが道を行くときに、主はいったいどのような振る舞いをなさるのでしょうか。主は知らん顔をなさるのでしょうか。もしそうだったら大変です。44節を読むと、もちろん違います。

詩篇 106篇44節

**それでも彼らの叫びを聞かれたとき、主は彼らの苦しみに目を留められた。**

とあります。即ち、いかなることがあっても、イエス様は救い主であられ、ご自分に属する者をお見捨てになりません。

パウロはこのことを強調するために、当時の信じる者に書いたのです。新約聖書テモテ第二の手紙、彼の書いた最後の手紙です。

テモテへの手紙・第二 2章13節前半

**「私たちは真実でなくても、彼は常に真実である。」**

「私たち」とは、信じる者です。「彼」とは、イエス様です。

結局、イエス様ご自身は変わらないし、イエス様の愛も変わらないのです。

13節後半

**「彼にはご自身を否むことができないからである。」**

とあります。

三千年前に当時の世界を支配したダビデも、このことを体験的に知っていたのではないかと思います。彼の告白は、第二サムエルの22章に書かれています。本当に素晴らしい信仰の告白です。お読み致します。

サムエル記・第二 22章2節、3節

**「主はわが巖、わがとりで、わが救い主、わが身を避けるわが岩なる神。わが盾、わが救いの角、わがやぐら。私を暴虐から救う私の救い主、私の逃げ場。」**

「主はわが巖」とは、「主は私のもの」ということです。

これはダビデの単なることばではなく、体験したものでした。「私を救う私の救い主」ということばは、ダビデにとって決して理論ではなかったのです。彼が体験した事実でした。ですから、彼はこのように主をほめたたえるようになったのです。

このことばを発したダビデと同じように、私たちが日々私たちに助け、救うことのおできになる救い主を体験し、勝利の声を上げることができれば幸いなのではないのでしょうか。サムエル記・第二 22章4節

**「ほめたたえられる方、この主を呼び求めると、私は、敵から救われる。」**

私たちがなすべきことは、ただ主を呼び求めることだけです。助けを求めることだけです。私たちは、本当に自分自身に絶望しない限り、心の底から主を呼び求めることをしない者ではないのでしょうか。

私たちはどうすることもできない性質を持っているということを、本当に認めることができるならば、自分の力で何かをしようとせずに、ただまことの救い主なるイエス様を呼び求めることしか方法はないでしょう。つまり、祈る者こそ本当の意味で頼る者なのです。まったく新しいいのちの者に変えられ、今まで知らなかった摂理を体験するようになります。

詩篇 85 篇の 4 節に戻りまして、ここで作者は次のように祈ったのです。

詩篇 85 篇 4 節

われらの救いの神よ。どうか、私たちを生き返らせ、私たちに対する御怒りをやめてください。

それは信じる者にとってまったく恐ろしい状態です。信じる者として自分は救われていると信じ疑わない者であっても、主と私たちの直接の交わりではなく、その間に何ものか妨げるものが存在していると感じる例が少なくないでしょう。

しかし、主は常に私たちを待っていてくださり、私たちが心から悔い改めるなら、罪を全部赦す備えをしておられるのです。主は新しい喜びを与え、新しい力を授けてくださるのです。

詩篇 85 篇 6 節

あなたは、私たちを再び生かされないのですか。あなたの民があなたによって喜ぶために。

「私たち」とは、「私」です。

大いなる救い主は、新たなる始まりを与えたいと願っておられるのです。主は完全に救うことがおできになります。私たちも新たなる出発をしましょう。完全な救いをいただくではありませんか。

私たちは、罪人であるがゆえに、聖なる主の前に恐れかしこんだことがあったのでしょうか。「私はわざわざいなる者、汚れた者、無関心な者、支配欲に満ちた者、臆病者、ねたみ深い者、愛のない者です」。このように叫んだことがあるのでしょうか。

主の前にはすべてが明らかにされ、主は何から何まですべてお見通しであり、すべての思いが主には知られています。けれど、この聖なる主こそあなたの救い主です。主イエス様は私たちを贖って、罪を赦してくださり、そのためにご自分のいのちを与えてくださったのです。

旧約聖書の福音書であるイザヤ書の中で、素晴らしいみことばがたくさん出てきます。読んでみましょう。43 章のまず 3 節を読みます。

イザヤ書 43 章 3 節前半

「わたしが、あなたの神、主、イスラエルの聖なる者、あなたの救い主であるからだ。」

信じてても信じなくても事実です。「わたしはあなたの救い主です」。



## 1 1 節

「わたし、このわたしが、主であって、わたしのほかに救い主はいない。」

主は私たちに目を留められ、このように呼びかけておられます。

### 1 節後半

「恐れるな。わたしがあなたを贖ったのだ。わたしはあなたの名を呼んだ。あなたはわたしのもの。」

イエス様は、裁いたり、宣告をなさったり、罰したりなさるのではなく、私たちを助け救うお方としてそば近くにおられるのです。

私たちはこの救い主であるイエス様に、無条件に、絶対的に、余すところなく明け渡そうではありませんか。イエス様は、ご自分の權威、ご自分の栄光を私たちの生活の中に、私たちの生活を通して現わしたく思っておられます。

「あなたのみこころがなりますように。私はあなたの導きにすべてをゆだねる決心ができております」。このような心構えがいつもできている者は幸いです。「主よ。私はただあなたただけにより頼みます」。このように、日々新たに言うことのできる者は確かに幸せです。

救い主なる主イエス様は、どこでも臨在しておられます。このイエス様は完全に救うことができになるお方です。私たちの前に、また私たちの周囲にあって、私たちを取り巻いている物ごとが、私たちを不安に陥れるようなことが少なくありません。

しかし、イエス様は、私たちの前に、隣に、後ろに立っておられるのです。私たちは、決して、決してひとりぼっちではありません。主は私たちの近くにおられます。ですから、私たちは前進することができるのです。イエス様はご自身のご臨在、ご自身の力、ご自分のものを明らかにしようと望んでおられます。

旧約聖書の中の、みことばです。集会のカレンダーの中にも引用されている箇所です。非常に信じにくいみことばです。なぜなら、まったく理解できないからです。ゼパニヤ書の3章。旧約聖書の一番後ろのほうです。

### ゼパニヤ書 3章17節

あなたの神、主は、あなたのただ中におられる。救いの勇士だ。主は喜びをもってあなたのことを楽しみ、その愛によって安らぎを与える。主は高らかに歌ってあなたのことを喜ばれる。

どうしてでしょうか。おそらく答えられる人はいないでしょう。どうして？「主は高らかに歌ってあなたのことを喜ばれる」。

イエス様の身代わりの死こそ、愛されている証拠そのものです。私たちもこの作者のように言うことができるのでしょうか。それとも、そうでないため、主が悲しげに見ておられるのでしょうか。

「主は救うことができる」。主は「完全に救うことができになる」ことについて、最後に五つの証しを見てみましょう。

1. まず、ダニエルの三人の友だちの証しです。

ご存じのように、彼らは妥協するよりも死んだほうがましだという態度をとったのです。何があっても彼らは主に頼りましたので、火の燃える炉の中に投げ込まれるようになりました。ダニエル書3章の17節です。当時の世界を治めたネブカデネザル大王に向かっての答えです。彼らは外国まで連れて行かれましたし、外国人でした。けれども、主から離れられなかったのです。

ダニエル書 3章17節

**「もし、そうなれば、私たちの仕える神は、火の燃える炉から私たちを救い出すことができます。王よ。神は私たちをあなたの手から救い出します。」**

結局、「もし、そうなれば、私たちは火の燃える炉の中に投げ込まれても良いです」と。この三人は、ただ自分の仕えている主の誉れだけを見て、自分たちの身の上に何が起ころうが構わなかったのです。

私たちも自分の名誉を無にして、ただ主の誉れだけを大切にするならば、「主の救う力」を毎日体験することができます。

2. 第二番目の証しは、アブラハムの証しです。

ローマ人への手紙の4章の中で、アブラハムの信仰生活について短く書かれています。

ローマ人への手紙 4章20節、21節

**彼は、不信仰によって神の約束を疑うようなことをせず、反対に、信仰がますます強くなって、神に栄光を帰し、神には約束されたことを成就する力があることを堅く信じました。**

どのようになるかももちろん分からなかったのです。このアブラハムも、結局、栄光を主に帰したため、主は成就する力があることを確信し、体験することができたのです。「主は救うことができになる。主にとって不可能なことはない」と、彼は喜んで証しすることができました。

3. 第三は、パウロの証しです。

彼は、主の大いなる力を何度も何度も経験したので、次のように書き記すことができました。

コリント人への手紙・第二 9章8節

**神は、あなたがたを、常にすべてのことに満ち足りて、すべての良いわざにあふれる者とするために、あらゆる恵みをあふれるばかり与えることのできる方です。**

結局、「主はできる。主にとって不可能なことはない」と。

パウロは、エペソ人への手紙の中で、同じような内容ですが書いたのです。

エペソ人への手紙 3章20節、21節

どうか、私たちのうちに働く力によって、私たちの願うところ、思うところのすべてを越えて豊かに施すことのできる方に、教会により、またキリスト・イエスにより、栄光が、世々にわたって、とこしえまでありますように。アーメン。

パウロは、「主はできる」と、疑わずに喜んで告白したのです。

殺される前に、彼はまた書いたのです。

テモテへの手紙・第二 1章12節後半

その方は私のお任せしたものを、かの日のために守ってくださることができると確信しているからです。

「主はできる」。

4. ヘブル書の著者の証しであり、告白です。

この作者は、私たちの主を、大いなる大祭司として常に生きておられ、常にとりなしていただくお方として、心から主をほめたたえたのです。彼の証しは、初めに読まれた箇所です。

ヘブル人への手紙 7章25節

したがって、ご自分によって神に近づく人々を、完全に救うことがおできになります。キリストはいつも生きていて、彼らのために、とりなしをしておられるからです。

2章18節

主は、ご自身が試みを受けて苦しまれたので、試みられている者たちを助けることがおできになるのです。

「主はできる」。

5. 最後に、ユダの証しです。

イエス様の肉親の弟だったのですが、彼は私たちを守ることのできるお方として、また、イエス様の御姿に似た者として私たちを造り変えることができるお方であると証ししたのです。ユダ書の最後の二節です。

ユダの手紙 24節、25節

あなたがたを、つまづかないように守ることができ、傷のない者として、大きな喜びをもって栄光の御前に立たせることのできる方に、すなわち、私たちの救い主である唯一の神に、栄光、尊厳、支配、権威が、私たちの主イエス・キリストを通して、永遠の先にも、今も、また世々限りなくありますように。アーメン。

「主は生きておられ、主はできる」と考えると、本当に安心して将来に向かうことができるのではないのでしょうか。

了